

教育相談課だより No.18

学力を経済学から捉える①

「学力の経済学」（中室牧子著 ディスカヴァー・トゥエンティワン）は、経済学から教育効果を検証している興味深い書籍です。紹介された検証の一つに、ハーバード大学での研究があります。子供の学力を上げるために、「本を1冊読んだらご褒美をあげます」と「テストでよい点を取ればご褒美をあげます」とのどちらが効果的かを検証したものです。

「本を1冊読んだらご褒美をあげます」は、「出席する」「宿題を終える」などの教育上の「インプット」に褒美を与える方法です。「テストでよい点を取ればご褒美をあげます」は、学力などの「アウトプット」に褒美を与える方法です。「インプット」に褒美を与えると、本を読むことは多くなるでしょうが、必ずしも成績がよくなるとは限りません。「アウトプット」に褒美を与える方法は、より直接的に成績をよくすることを目標にしています。この検証での結果、学力向上に効果的だったのは、「インプット」に褒美を与えられた子供だったそうです。この結果について様々な考察がされていますが、興味深いのは、「アウトプット」に褒美を与える場合には、「**どうすれば成績が上げられるのかという方法を教え、導いてくれる人が必要である**」とされている点です。

今、教育界はGIGAスクール構想の実現に向けて、急ピッチで環境を整えているところです。同時に、学校現場の先生方は、授業でICT機器を使いこなせるかという不安を抱いているようです。中には、ただICT機器を使えばいいと誤解される場合もあるかもしれません。GIGAスクール構想は、これまでの教育実践にICT機器を活用することで、学習活動の一層の充実を図り、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を図ることをねらった取組です。もちろん学習状況に応じた個別学習の充実を図ることも重要ですが、文部科学省では、児童生徒一人一人の反応を踏まえた双方向型の一斉授業や、各自の考えを即時に共有し、多様な意見にも即時に触れられるような授業も求めています。すなわち、他者と関わり合いながら学習を進めることは外せません。「学力の経済学」で示された「**どうすれば成績が上げられるのかという方法を教え、導いてくれる人が必要である**」ということは、最先端のICT機器が導入されたとしても、教師・児童生徒がお互いに関わり合い、教え合い、刺激し合うような関係性が必要であることを、経済学の視点から指摘しているのだと思います。

